

フィリピン人帰還移民に関する一考察 —再統合と高齢者介護の視点から—

細田 尚美

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

Return Migrants in the Philippines: Reintegration and Elderly Care

Naomi Hosoda

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

hosoda@asafas.kyoto-u.ac.jp

要 旨

本稿は、海外就労者送り出し大国といわれるフィリピンにおいて、海外で長期間滞在した後に帰還した海外就労者のケア、特に海外就労者が高齢となった際のケアについて、サマル島カルバヨグ市で実施した質的調査に基づき、検証する。具体的には、調査対象者たちが①帰還後にどのように出身地域に再統合されたのか（されなかったのか）、そして②高齢となった場合、だれが日常のケアをしているのか、の2点について論じる。今回の調査結果からは、帰還移民たちは経済的な面では、帰国後に大きな問題を抱えておらず、再就職して、または貯金や年金を使って暮らしていることが分かった。一方、彼／女たちの社会関係をみてみると、多くは帰国後に家族と同居しているが、一部に家族以外と暮らしている調査対象者もいた。後者には、個人的な好みで少人数で暮らしているケースと、長期間の海外滞在中に家族が「トランスナショナル・ファミリー」となったために帰国時に自分しか残っておらず、結果として誰か別の人（血縁者や非血縁者、住み込みの家事労働者など）と暮らすことになったケースとがあることが明らかになった。

キーワード：国際労働移動、帰還移民、高齢者ケア、フィリピン、トランスナショナル・ファミリー

はじめに

少子高齢化が進み、1998年をピークに労働力人口が減り続けている日本では、外国人労働者の受け入れ論議が断続的に続いている。近年では、2020年の東京五輪に向けた大規模なインフラ整備、家事負担を軽減し日本人女性の就業を促進させようとする女性「活用」政策などのために、外部からの労働力として外国人労働者受け入れを進めようとする

動きが活発となっている。一方で、外国人労働者の増加は日本国内の治安の悪化や文化摩擦、日本人労働者の実質賃金の低下などを引き起こすとして、受け入れに反対する意見も根強い。

本稿は、これら日本の外国人労働者の受け入れが及ぼすであろう、日本国内の様々な影響ではなく、送り出し国側で起こりえる影響の方に着目する。国際的な人の移動の急激な増加は、受け入れ国のみならず、送り出し国の社会の諸側面にも大きな影響を及ぼすと考えられている¹。たとえば、途上国の看護師や介護士が国外の高齢者の看護や介護にたずさわることで、途上国にいる自らの両親や祖父母の家族は看護師や介護士本人ができずに、結果として看護師や介護士の送出国において高齢者ケアの担い手不足を引き起こすのではないかと懸念する声が挙がっている（佐藤 2009）。事実、日本とインドネシア・フィリピン（現在はベトナムも）の間で締結された経済連携協定（EPA）による制度などを通じて日本で外国からの看護師や介護士を受け入れる際にも、送出国における高齢者ケアにも十分配慮すべきではないかとの意見もしばしば聞かれる（安里 2011；ロレンゾ 2009）。国際的な相互連携が世界各地で進む現在、人の移動に関する新たな取り決めをする際には自国の利益だけでなく、相手国の状況も事前に深く知ることが不可欠だろう。

こうした問題意識にそって、筆者は本誌などで、外国人看護師・介護士を受け入れる日本の施設の意見（細田 2011a）、フィリピンにおける海外就労者の急増の背景とその社会的影響（細田 2011b; 2011c）、フィリピンにおける高齢化とケア労働者（候補生を含む）教育と就労の現状（細田 2012）を発表してきた。本稿では、本国フィリピンに帰還した海外就労者のケア、特に海外就労者が高齢となった際のケアについて考えてみたい。

フィリピン人の国際労働移動に関する研究の蓄積は厚くなってきているが、帰還後の海外就労者に関する研究はそれほど多くない（越智 2010; Asis 2008: 81）。また、フィリピン人海外就労者の帰還後の研究の中心は、彼/女らが国外で得た収入や技術の使い道について、特にそれらがフィリピンの経済開発に役立っているかどうかについてである（Guevarra 2010; Asis and Baggio 2008）。長期間にわたり、国外で働き続けた海外就労者が高齢となり帰還した後にはどのように暮らしているのか、だれがケアをしているのかといった点に関して論じた実証研究は僅少である。その数少ない研究のひとつ、フィリピン人の移民現象を長年研究し続けているステラ・ゴ氏による『フィリピンと帰還移民』（*The Philippines and Return Migration*）は、同書で提示されている数ある事例のなかで、長年イタリアで家事労働者として働き帰還したフィリピン人女性8人について言及している。それによると、中年や高齢になった彼女らは帰還後、病気治療等の経済的負担、孤独、収入源の不安定さなどが目下の問題とみていることを明らかにした。しかし同書は、彼女たちの生活の様子や彼女たちの暮らす社会状況全般については触れていないため、それら問題がどのように起きているのかという文脈はわからない。

したがって、本稿は、ある特定地域の社会的文脈を述べ、そのうえで調査対象者たち

が①帰還後にどのように出身地域に再統合されたのか（されなかったのか）²、②高齢となった場合、だれが日常のケアをしているのか、の2点について論じる。まず、フィリピン人海外在住者の動向と彼／女らの年金制度について整理し、続いて調査地であるサマル島カルバヨグ市の高齢者の概況を記す。つぎに、同市で行った海外からの帰還者に対する調査結果をもとに、渡航先で永住権を持った人と、そうでない海外就労者のケースに分けて、帰還後の再統合と高齢時のケアの状況を述べ、最後にそれぞれの傾向を考察し、まとめる。

1. 海外で働くフィリピン人の退職後の生活

フィリピンは現代の海外移民大国のひとつに数えられる（新田目 2015）。同国政府による海外在住フィリピン人（Overseas Filipino）数は、2013年12月の推定で1,023万8,614人である。この数値はフィリピンの総人口の1割に値する。また、海外在住フィリピン人数は、統計が公表されている2000年から現在に至るまで毎年増え続けている（Commission on Filipinos Overseas 2013）。

この在外フィリピン人推定数には、フィリピン国外で市民権を取得するなどして永住者となっている者（permanent migrant）、フィリピン人海外就労者（overseas Filipino migrant、以下OFW）などとして一時的に国外に在住している者（temporary migrant）、政府での手続きを経ずに海外に在住している者（undocumented migrant）の3種が含まれている。2013年現在、永住者は全体の48%で最も多く、続いて一時滞在者41%、未登録者11%の順になっている。このうち、全体の9割を占める永住者と一時滞在者の地理的分布をみると、図1に示したように、永住者は、アメリカなど北米やオセアニアの移민국に集中している。対して、一時滞在者は、移민국ではないが外国人労働者を積極的に受け入れる中東やアジアの国々に最も多く暮らすというように、両者はともに海外在住フィリピン人と呼ばれてはいるが、両者の移動パターンは明らかに異なる³。

この差は、両者が利用する社会保障制度にも現れている。本稿では、退職後の年金に絞ってみていこう。国外で永住権を得たフィリピン人が帰還すると、フィリピンでは「バリックバヤン」（balikbayan）と呼ばれる。バリックバヤンの場合、一般に、永住権を得た国の社会保障制度によって年金が支給される。彼／女たちの多くは先進国の年金制度に基づいた年金額を受給するため、国外で長期に暮らした後にフィリピンに帰国した場合、フィリピンの方が物価水準が低いため、その年金額は生活するうえで十分であることが多い。対して、一時滞在者のほとんどを占めるOFWの場合、彼／女たちは海外渡航中、フィリピンの社会保障制度（Social Security System、以下SSS）に加入することが義務付けられているので、帰国後、年金受給年齢に達したら年金が支払われる。フィリピンのSSSは、国家公務員ならびに地方公務員に対する社会保障制度（Government Service

Insurance System、以下GSIS) に加入しない、民間企業の被雇用者、自営業者、その他の任意加入者に対する社会保障制度である(細田 2012)。長期に加入している場合、GSIS 加入者ならば退職後に生活を営むためにほぼ十分な年金を受けられるが、SSS 加入者は、その支給額レベルでは退職後に生活を維持することが困難な例がかなりあるといわれる⁴。

2. 調査地における高齢者の状況

調査を行ったサマル島のサマル州カルバヨグ市(Calbayog City, Samar Province) は、マニラの南東約500キロの位置にある。サマル島はルソン、ミンダナオ両島に次ぐ国内3位の面積を持つ島だが、目立った産業も大きな都市もない。島の住民の8割は農村部に暮らし、その多くは自給用の農作物を生産するほか、換金作物としてココナツ栽培を行っている。ほかに、島の海岸部では小規模漁業も行われている。島民の平均所得額は低く、同島はフィリピン国内で貧困率の最も高い地域のひとつである(Philippine Statistics Authority 2015)。

カルバヨグ市はサマル島内では最も人口規模の大きな市で、2010年現在の人口は17万2,078人である(Philippine Statistics Authority 2016)。カルバヨグ市の市街地とその周辺には、大聖堂、商業施設、州立大学、私立大学、長距離バスターミナル、空港があり、市とその周辺の町々の商業・交通・文化の中心地の役目を果たす。同島は、従来からフィリピンのなかでも人口密度の低い地域だったが、20世紀後半には、島内の開発の遅れにくわえ、自然災害や共産党ゲリラと国軍との衝突が相次ぎ、島を離れてマニラなどの都市へと移り住む人が目立って増えた(Hosoda 2007)。

図2にあるように、カルバヨグ市の65歳以上の人口は7,899人(2010年)で、市全体の人口の4.6%にあたる(Philippine Statistics Authority 2016)。これは、フィリピン全国 の平均値4.4%に比べると若干高い。また、図3のグラフが示すように、同市の年齢層別の人口を全国平均と比較すると、同市では5~14歳の人口が全国平均よりも1~2割程度高く、逆に20~34歳が全国平均よりも1~2割程度低い傾向が見られる。この現象は、同市では、学校教育を終えた男女はマニラなどの都市で仕事を探し、中年期以降にその一部が都市から戻るといった向都移動のパターンが住民の間にみられるためである。高齢になり介護が必要となった際には、都市でも農村でも自分の子どもいるところに身を寄せることが一般的である(Hosoda 2007)。

別の論文で記したように、カルバヨグ市だけでなく、フィリピンでは全般的に、高齢者ケアの担い手は家族である(細田 2012)。高齢の親の介護は子の義務との考え方が強く、家族がいるのに高齢の親を介護施設に入居させることは文化的なタブーとみなされている。しかし、貧困層の間では、家族構成員それぞれが生存レベルの暮らしを送っているため、家族が高齢の親と同居していない例もあるという(Abejo 2004)。また、フィリピン

では高齢者は社会の中で尊敬されるべき存在との意識が高い。特にサマル島のような地方では、人々は見知らぬ人であっても高齢者は大事に扱う慣習が強く残っている。そのため高齢者は、荷物を持ってもらう、席を譲ってもらうなどの簡単な手助けは周囲の人から受けられる。さらに、高齢者は健康上の支障のない限り、働ける間はできる範囲で働き続ける傾向がみられる。職場からは退いた場合でも、家事や身の回りのこと、コミュニティ活動に参加することは当然と考えられている。

行政側も、徐々にではあるが、高齢者の生活支援を進めている。全般的な状況としては、日本と比べると高齢化がそれほど進んでいないフィリピンでは、高齢者支援は市民の間の大きな関心事ではない。しかし、高齢者は医薬品や生活必需品等の購入、公共交通機関の運賃や宿泊施設利用料などが2割引となる経済的支援サービスや、高齢者同士の相互扶助・レクリエーション組織である「高齢者団体」(Senior Citizens' Association)の各自治体での設置など社会的な支援をすることが既に法律で定められている⁵。さらに、カルバヨグ市においては、貧困生活者と認定された60歳以上の市民に対して月500ペソ(約1,250円)が市から給付されている。

なお、高齢者ケアを専用とする施設の存在自体がまだ一般的でないフィリピンでは、高齢者介護の公的施設は極僅かしかない。カルバヨグ市にも国立・公立いずれの高齢者介護施設は存在しない。だが、カトリック教会のボランティア団体が身寄りのない高齢者のために市民からの寄付をもとに運営する施設が2カ所存在する。2015年2月現在、両施設にはそれぞれ10数人の高齢者が入居していた。

3. 帰還移民のケアに関する調査結果

以下では、筆者が2015年2月にカルバヨグ市にて実施した外国からの帰還移民についての質的調査の結果をまとめる。調査は、表1に示したように、外国で永住権を取得後に帰国したバリックバヤンたち8名と、OFWとして外国で働いた経験のある元OFWたち10名の計18名に対して筆者が直接面接を行う形で実施した。調査対象者の選定は、カルバヨグ市職員2名(1名は市の高齢者担当者、もう1名は市内の各バラングイ(最小行政区)の状況に詳しい経済振興担当者)に依頼した⁶。依頼時には、本論文の目的に沿って、年齢が50歳前後かそれ以上、長期(およそ6年以上)海外に滞在した経験のある人で、市街地と農村部の双方から対象者を選ぶように依頼した。面接候補者となった人たちには、筆者が事前に研究の目的を伝え、面接の許可を得てから面接を行った。面接は一人当たり30分~2時間半で、基本的に調査対象者の自宅で筆者が質問し対象者が口頭で答えるという形式で実施した。

調査対象者の属性、移動歴、同居者については表1に示したとおりである。18名中、10名が女性、8名が男性であり、年齢は47~96歳(平均57歳)、国外の滞在期間は7~45

年（平均17年）であった。また、住んでいる家や地区といった生活水準からすると、中間層とみられるのは7名（表の3～7と14～15）であり、残りの11名は低所得層と考えられる。

帰還後の再統合や高齢者ケアの観点からは、バリックバヤンと元OFWの間には差が見られるため以下では両者を分けて記述する。なお、以下の文中で、大カッコ（〔 〕）内の数字は表1の事例番号（No.）に対応している。

(1) バリックバヤン

米国などからの年金や蓄えた貯金等で生活する彼／女らは、帰国後、自営業または仕事をせずに地元で暮らすというパターンが主流である。渡航先としては、米国が8名中6名と圧倒的に多い。これは、図1で示されているように、カルバヨグ市に限らず、フィリピン全体でみられる傾向である。20世紀初頭から米国の植民地となったフィリピンでは、20世紀前半から米国に移住する人が多く、その傾向は1946年の独立後も続いた。現在でも、フィリピン人永住者が最も多くいるのは米国（2013年時点で314万人、フィリピン人永住者全体の65%）である（Commission on Filipinos Overseas 2013）。

面接をしたバリックバヤンたちの中で目立つのは、米国に移住した後、高齢になってカルバヨグ市に戻り、ボランティアや社交ダンスなどの趣味を楽しみながら暮らす人たちである〔2、5、6〕。聞き取りによると、20世紀後半、カルバヨグ市の中間層の若者たちの間では、米国での1965年移民法改正以降、米国移民となり米国で暮らすことに憧れる風潮が強まった。また、自分自身は米国移民申請しなかったが、子どもが米国移民となり、その子どもによって米国に呼び寄せられて米国移民となった例もある〔1、4〕。子どもによる呼び寄せで米国に渡った人は、米国では孫の世話をするなどして過ごすことが多い。反対に、親が米国市民であったために、米国に呼び寄せられた例もあった〔7〕。さらに、8例中2例は、国際結婚によって英国または台湾の永住権を獲得した例である〔3、8〕。年金や貯金をもとに暮らすバリックバヤンたちは一般に、豊かな生活を手に入れた人たちとみなされるが、必ずしも中間層になれるということではない。帰国後に事業に失敗したり、病気・ケガをしたりして裕福な暮らしを維持できなくなる例もある〔1、2、8〕。

高齢となった場合の同居者については、家族・親族と暮らすことが一般的といえる。だが、なかには敢えて家族・親族から離れて少人数で暮らすことを選択する例もある。英国人の夫の退職後はカルバヨグ市の農村部にある実家のそばで暮らすつもりだったが、親族や近所の人たちからの頼みごとが嫌になり、子どものいるセブ島に新たな家を建てて、そちらを中心に暮らすようになった例〔3〕や、米国滞在中に馴染んだ独立心の保てる生活様式のほうがよいと家族・親族から離れて暮らす例〔4、5、6〕がある。いずれにせよ、これら少人数で暮らす人たちも、日常生活で他の人の援助が必要になったり、病気等の緊急対応が要る場合に備え、近くに頼れる子どもがいたり〔3〕、同居する若者がいたり

[4]、妹や住み込みの家事労働者 [5、6] がいる。現在、妹と、家事労働者と暮らす女性の例を次に挙げる。

事例：エルサ（71歳）

カルバヨグ市生まれのエルサは、19歳から小学校の教員として働いた。1965年に米国の移民法が改正され、専門職従事者ならば米国の移民になれると聞き、移民申請を行った。「私はこの町に退屈していて、どこかに冒険したくて行った。アメリカはオープン・カンントリー（移民にも機会が開かれている国）だと聞いていたから」。1969年にニューヨークに着いて、まず店員として働き始めたが、米国では仕事の能力のある人はきちんと認める国だと知り、勉強をしてシニア・アナリストの資格を取った。フロリダで働いたが、独りで暮らすのは辛いと家族のいるニューヨークに戻り、今度は会計士の資格を取り、会計士として働き始めた。

2013年に70歳になったことをきっかけに「もう十分仕事をした。これからは自分と人のために生きる」と会計士の仕事を辞めた。かつてから退職したら祖国フィリピンで老後を過ごす決めていた。そのため、2005年から一時帰国するたびに自分の店（印刷屋）を始める準備を整えていたので、帰国後すぐに店を開店させ、同様に米国から帰国した妹と一緒に店を経営している。

事業経営以上にエルサが力を入れているのは、高校の同窓会を通じてのボランティア活動である。出身校であるカルバヨグ市の私立高校の1959～60年卒業生で組織する同窓会の幹事となり、米国とカルバヨグの教会組織をつなぎ、米国で集めた募金を使いカルバヨグ大聖堂の修繕作業などを行っている。エルサを含む同窓会の67名（10人は既に死亡）のうち、約4分の1にあたる16名が米国移民となった。その後、4名がエルサのように退職後にカルバヨグ市に戻っている。同窓会メンバーたちは様々な記念パーティを開いたり、旅行を企画したりしている。エルサは、印刷店の共同経営者の妹と2人で両親の建てた実家で暮らしている。「アメリカで何でも自分でやっていたから、（カルバヨグに戻った今も）大勢の人と一緒に暮らしたいと思わない。洗濯物などは近所の人に頼んでやってもらう。自分の家では静かに暮らしたい」と、今の暮らしかたに満足していると語る。

エルサのように、バリックバヤンのなかには、自分の家族の多くが次々と米国あるいは別の外国や国内の都市に移住し、カルバヨグ市で暮らす人がいなくなってしまう、あるいは数人だけという例は少なくない。しかし、同市での退職後の暮らしを選んだ人たちの間では、外国では働くだけで楽しみが少ないが、カルバヨグには様々な楽しみがあり、それが自分たちの心身の健康にも良いと肯定的に考えている。調査対象者のなかには、本人が「ハウスメイト」(housemate) と呼ぶ、カルバヨグ市内に暮らす若者3名に自分の家

に無料で住ませ、代わりに、家事、送り迎え、来客の対応などを手伝ってもらい独り暮らしの高齢の女性もいる [4]。経済的な基盤が安定したバリックバヤンにとっては、物価が安く、高齢者を敬う文化のあるフィリピンの地方都市は、自分の思い描いた生活が可能となる場所と捉えられている様子である。そして、自分の周囲にいる人たちから手助けを得て、日々を過ごしているといえよう。

(2) 元OFW

先述のように、元OFWの場合は、外国で長年働いていてもその国の社会保障制度に加入することはないため、帰国後の経済基盤を自分で工夫して確保しなくてはならない。したがって、帰国後に新たな活路を見出すことが重要となっている。渡航先をみると、サウジアラビアなど中東諸国が10名中8名と多いが、これもバリックバヤンの場合と同様にカルバヨグ市が特殊ということではない。OFWの渡航先地域としては、中東でフィリピン人が大量に働き始めた1970年代後半から現在に至るまで、中東が第1位の座を占める。特に、1980年代までは中東がOFWの受け入れの約8割を受け入れていた。さらに、職種としては建築関係やサービス業（家事労働者を含む）に従事するフィリピン人が多い（細田2011c）。

帰国後、10名の元OFWたちは、1名を除き、帰国後もすべて経済活動に従事している。10名のなかには、国外で得た技術を帰国後に活かした仕事で生計を立てている例があり、海外就労がキャリアアップにも影響することを示している。たとえば、1998年から7年間サウジアラビアの建設現場で働いたという男性は、体調不良となり帰国したが、帰国後に自宅で溶接の仕事を始めた [10]。彼は、「サウジ帰り」(ex-Saudi) の溶接工としてカルバヨグ市やその周辺で評判が高い。それは、サウジアラビアなど海外の企業で数年間勤めていたことは、彼の技術が確かだという証拠と考える人がいるからだという。他方、海外経験が活かさない例もある。アラブ首長国連邦 (UAE) の家庭で家事労働者として2005年から7年間働いた女性は、帰国後に自分の庭先で惣菜屋を開いたが、周囲の他の惣菜屋との差別化をうまく図れずに、あまり利益を上げていない [18]。

元OFWの帰国後の同居者は家族であることが多い。外国の永住権を持つバリックバヤンと違い、契約労働者として外国で働くOFWの場合、外国での滞在年数には大きなばらつきがある。聞き取りによると、比較的長期間外国で働いた人の場合、自分の目標とした資金が貯まったとき、子どもの教育が完了したとき、そして高齢で働きにくくなったとき、外国滞在のひとつの区切りとなり、年齢的には40～60歳ぐらいになって帰国を決意する。帰国後は、自分の家族と暮らし、高齢になり世話人が必要となったら、子どもが面倒をみてくれると考えている人が多い。

ただし、元OFWのなかにも、地元子どもが一人も残っていないというケースがある。自分が国外で稼いだ収入で子どもたちに高等教育を受けさせ農漁業や単純労働以外の

仕事に就かせることは多くのOFWたちの夢とされる。しかし、その結果、子どもたちもOFWになったり、地元以外の場所に移動したりするという状況が発生する。下はそのような事例である。

事例：ワニータ（62歳）

カルバヨグ市で生まれたが、15歳のときにマニラで美容師をしていた姉のところへ身を寄せ、マニラで高校を卒業した。その後、サマール島出身の男性と結婚し5人の子どもが生まれたが、夫が突然病死したことから急遽、子どもたちを姉に預けて自分は生活費や子どもの教育費を稼ぐためにUAEで家事労働者となって働いた。「(雇用主の家族は)私の料理を気に入って、『死ぬまでうちで働いてほしい』と言われていた。その家族は私を大切に扱ってくれ、私は幸せだった」と語る。彼女の子どもたちはカルバヨグ市に戻り、そこで教育を終えると、UAEやその近隣諸国で就職先を見つけた。5人の子どものうち、娘1人は高校を中退し、地元でシングルマザーとなった。

50代から次第に膝や指が痛むようになり、高血圧も気になり始めた。重い鍋や家具を持ち上げるのも辛くなった。60歳になったとき、もう自分はOFW生活を引退する時期がきたと思い、帰国した。帰国後はカルバヨグ市で人を雇いパン屋を始めようとUAEやフィリピンで調理器具を購入したが、あてにしていた中東にいる子どもたちからの資金援助を断られ、その計画は中断している。それまでひとつの家族のように付き合ってきた姉夫婦は近年、相次いで二人とも死亡し、地元にいる自分の娘は病気で療養中である。現在は一人暮らしで、生活費にはSSSの年金(2,000ペソ、約5,000円)と子どもからの仕送り(4,000ペソ、約1万円)を充てている。

ワニータの中東在住の子どもたちは、いずれも中東で長期滞在を始めており、当分帰国する見込みはない。近所には義理の兄の子が住んでおり、時折、ワニータの様子を見に来る。OFWの場合、就労できなくなったら帰国せざるを得ないため、老後はフィリピンで過ごすことになる。多くは家族が面倒をみるが、OFWの家族のなかには家族メンバーが次々と海外で就労するなどして世界のあちこちに暮らす「トランスナショナル・ファミリー」になる例も珍しくない。そうした場合、高齢で帰国した元OFWの世話をする人がいないという事態も起こりえると、ワニータの例は示している。

4. 「高齢者+α」世帯

調査で得たデータから帰還移民の再統合と家族の形態について考察すると、次のようなことが暫定的にいえるだろう。

18名の帰還移民の再統合の経済的側面についてみると、彼／女らは、帰国後に新たな事業を始めたり、あるいはそこまでの資金がなくても日常の暮らしを続けられるレベルの所得はあった。一方、再統合の社会的側面をみると、バリックバヤン、元OFWのいずれでも、帰国後に家族と同居する場合も同居しない場合もあることが明らかになった。その理由には、家族・親族から離れて生活したいという個人の好みや、そもそも彼／女らの家族が国内外の各地で暮らすという「トランスナショナル・ファミリー」化現象がある。

次に、高齢者となった帰還移民のケアに着目すると、彼／女らが独りで暮らす場合、1、2名程度の人と同居する形態がみられる。ここでは、この形態を「高齢者 + a」世帯と呼ぶ。その同居者とは、甥など血縁関係のある人だったり、ハウスメートなど血縁関係のない人だったりする。また、住み込みの家事労働者などの場合もある。独り暮らしの高齢者世帯に、孫が居候したり、あるいは子どもや孫がすぐそばに住んで高齢者の日常生活を手伝ったりすることは、帰還移民のケースに限らず、移動をしたことのない高齢者の間でもみられることである (cf. 細田 2012)。こうした高齢者に同居者がつくのが当たり前のよう実践されているのは、フィリピンを含む東南アジアの「家族」や「世帯」の概念には、状況に応じて柔軟にメンバーを編成できる側面があるという地域の文化的特性が影響しているのかもしれない (cf. Carsten 2004; Janowski 2007)。

今回調査した帰還移民のケースからは、この「高齢者 + a」世帯が一般よりも多いように思われる。今後、より広範囲な調査が必要だが、国民の1割が国外に在住し、そしてまた、若者の人口割合も比較的高いフィリピンでは、こうした形態の世帯が広まることは想像に難くない。

さらに、帰還移民の一部には、老後のライフスタイルに関する価値観の変化もみられる。バリックバヤンと元OFWを比較した場合、バリックバヤンの方が、若者のハウスメートを置いたり、自分の意思で親族と同居せずに独立して暮らしたりするなど、より地元の考え方から離れたライフスタイルで老後の生活を送っている。その背景には、国外で長期に暮らしたバリックバヤンたちは彼／女らの経済基盤だけでなく、ライフスタイルや考え方といった文化的な側面も変化し、さらにまた、地元の人たちからも「バリックバヤンたちは違う」と特別視されやすいためではないかと思われる。

これまでフィリピンでは、帰還移民やそれ例外の人も含め、最貧困層を除いて高齢者は家族とともに暮らすと考えられてきたが、家族と同居するかたちだけではない高齢者のいる世帯もあることが分かった。調査地では、高齢者介護を高齢者専用の施設で行うという方法ではなく、高齢者と血縁者あるいは非血縁者の若者が暮らすパターンや、家事労働者など外部者の人を雇うことで、高齢者が独りきりにならない方法が取られている。政府の海外就労の推進もあり海外在住者が増え続けているフィリピンでは、今後、このような「高齢者 + a」世帯が増えると予想される。

おわりに

本稿は、海外就労者送り出し大国といわれるフィリピンにおいて、海外で長期間滞在した後に帰還した海外就労者のケア、特に海外就労者が高齢となった際のケアについて、サマル島カルバヨグ市で実施した質的調査に基づき、検証した。具体的には、調査対象者たちが①帰還後にどのように出身地域に再統合されたのか（されなかったのか）、そして②高齢となった場合、だれが日常のケアをしているのか、の2点について調べた。その結果、調査を行った帰還移民たちは経済的な面では、帰国後に大きな問題を抱えておらず、再就職して、または貯金や年金を使って暮らしている。一方、彼／女たちの社会関係をみると、多くは帰国後家族と同居しているが、一部は家族以外と暮らしている。後者には、個人的な好みで少人数で暮らしているケースと、長期間の海外滞在中に家族メンバーも地元を離れてしまったために帰国時に自分しか残っておらず、結果として誰か別の人（血縁者や非血縁者、住み込みの家事労働者など）と暮らすことになったケースとがあることが分かった。

本稿が「高齢者+ α 」世帯と呼ぶ、この後者のパターンについては今後さらに、都市部においても同様の調査をしたり、あるいは帰還移民に限らず一般的にも起こっている現象なのかについて検証したりする必要がある。今の時点で言えることは、国策として海外就労を推進してきたフィリピンにおいて、トランスナショナル・ファミリーが増えた結果、その海外就労者が帰国した後に、従来の家族によるケアが必ずしも行われているわけではない点である。同国からの海外就労者の流出は、将来渡航先や職種に変化はあれども、今後も右肩上がりに増加すると予想される。さらに増えるフィリピン人海外就労者の本国帰還と、彼／女らの高齢時のケアにいかに対応するかという方策を考えることは、送り出し大国ならではの課題である。そして、受け入れ国側も、フィリピンから人材を受け入れる場合、彼／女らの帰還後の生活と高齢時のケアについて配慮する必要があるのではないだろうか。

謝辞

本稿の調査は科学研究費補助金基盤研究(A)「東南アジアにおけるケアの社会基盤：＜つながり＞に基づく実践の動態に関する研究」(2013-2015年度、課題番号25243005)を受けて行われた。また、調査中は、カルバヨグ市職員のMs. Liza LegitimasならびにMs. Tessie Mumarの2名にお世話になった。さらに2名の査読者の方々からも貴重なコメントをいただいた。ここに記して謝意を述べたい。

¹ 先進国や中進国における外国人労働者の受け入れの増加が途上国の社会にひずみをもたらすと論じる理論のひとつに、グローバル・ケア・チェーン論がある (Hochschild

2000)。この理論は、世界の子どもたちのケアが誰によって担われているかに注目する。先進国や中進国の多くで女性の社会進出が進んだことにより、以前は主に女性による家庭内の無償労働として行われてきた子どもたちの日常の世話が途上国の女性を家事労働者として雇うことでまかなう事例が増えた。すると、途上国の女性たちが長期にわたり国外に在住することになるために、逆に家事労働者自身の子どもは母国の祖母や拡大家族によってケアされざるをえない、あるいは十分ケアされないという状況になっているという。これが、ケア労働のグローバルなチェーン（連鎖）だというものである。

² 国際移住機関（IOM）の定義によれば、再統合（reintegration）とは、移民が帰還した際、本国あるいは居住国の出身地域に再び包摂される、または再び出身地域の一員となること、あるいはその過程である。再統合には、文化的、社会的、経済的な側面があるとされる（Perruchoud and Redpath-Cross 2011: 82）。

³ フィリピン人の国外移動の歴史的展開については細田（2011c）で詳しく記したので、そちらを参照されたい。

⁴ OFWに対する年金額が低い現状を受けて、フィリピン政府は新たに年金額を増やしたいOFW向けに「Flex Fund」という年金プランなどを開設し、事態の改善に努めている（cf. Philippine Social Security System 2015）。

⁵ これら高齢者支援制度の詳細については細田（2012：4-5）を参照。フィリピンの高齢者支援は、個人個人に焦点を当てるよりもコミュニティ内で高齢者支援を行おうとするコミュニティ・アプローチが中心である（Galon, et al. 2007）。

⁶ 帰還者に関する統計や名簿は、国全体のレベル、自治体のレベルのいずれでも存在しない（Cruz, et al. 2015）。そのため、本調査では地域の事情に詳しい人に該当者を紹介してもらう方法をとった。

参考文献

- Abejo, Socorro D. 2004. Living Arrangements of the Elderly in the Philippines. Paper for 9th National Convention on Statistics, Manila, October 4-5, 2004.
- 安里和晃. 2011. 「多様な人材の包摂とグローバルなアプローチ」『労働鎖国ニッポンの崩壊—人口減少社会の担い手はだれか』安里和晃（編）, 333-342ページ. ダイヤモンド社.
- Asis, Maruja M.B. 2008. The Social Dimensions of International Migration in the Philippines: Findings from Research. In *Moving Out, Back and Up: International Migration and Development Prospects in the Philippines*, edited by Maruja M.B. Asis and Fabio Baggio, pp. 77-108. Quezon City: Scalabrini Migration Center.
- Asis, Maruja M.B. and Fabio Baggio. 2008. Introduction: Will Transnational Transfer Foster Development in the Philippines?. In *Moving Out, Back and Up: International*

- Migration and Development Prospects in the Philippines*, edited by Maruja M.B. Asis and Fabio Baggio, pp. 1-16. Quezon City: Scalabrini Migration Center.
- Carsten, Janet. 2004. *After Kinship*. New York: Cambridge University Press.
- Commission on Filipinos Overseas. 2013. Stock Estimate of Overseas Filipinos as of Dec. 2013. (<http://www.cfo.gov.ph/Stock%202010.pdf>)
- Cruz, Frances Antoinette Cruz, Janina Clare Tan and Yvan Ysmael Yonaha. 2015. Assisting the Reintegration of Philippine Return Migrants through Mobile Technology. http://graduateinstitute.ch/files/live/sites/iheid/files/sites/public_relations/geneva-challenge/2015_SemiFinalists/Paper43_AssistingReintegrationPhilippineReturn.pdf(アクセス日2015年12月3日)
- Galon, Ma. Margarita M., Florita R. Villar, Ma. Suzette M. Agcaoili, and Kenneth G. Ronquillo. 2007. Philippine Country Report: Community Services for the Elderly in the Philippines: A Collaboration of the Department of Social Welfare and Development and the Department of Health. Philippine Country Report for the 5th ASEAN & Japan High Level Officials Meeting on Caring Societies Tokyo, Japan, 27-30 August 2007.
- Go, Stella. 2010. *The Philippines and Return Migration: Rapid Appraisal of the Return and Reintegration Policies and Service Delivery*. Geneva: International Labour Organization.
- Guevarra, Anna Romina. 2010. *Marketing Dreams, Manufacturing Heroes: The Transnational Labor Brokering of Filipino Workers*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Hochschild, Arlie Russel. 2000. Global Care Chains and Emotional Surplus Value. In *On the Edge: Living with Global Capitalism*, edited by Will Hutton, Anthony Giddens, pp.130-146. London: Vintage.
- Hosoda, Naomi. 2007. *The Social Process of Internal Migration in the Philippines: A Case of Visayan Migrants in Manila*. Afrasia Working Paper Series 26.
- 細田尚美. 2011a. 「介護福祉分野における国際化：フィリピン人EPA候補者受け入れ施設の経験から」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』2:15-24.
- . 2011b. 「送り出し国フィリピンにおける看護教育と看護師就労状況」『労働鎖国ニッポンの崩壊—人口減少社会の担い手はだれか』安里和晃（編）, 119-136ページ. ダイヤモンド社.
- . 2011c. 「海外就労先を開拓し続けるフィリピン」安里和晃（編）『労働鎖国ニッポンの崩壊—人口減少社会の担い手はだれか』179-194ページ. ダイヤモンド社.
- . 2012. 「アジアにおける高齢化と人の国際移動の現状：介護人材送り出し国フィ

- リピンでの社会的影響に着目して」『香川大学インターナショナルオフィス』3：1-18.
- Janowski, Monica. 2007. Introduction. In *Kinship and Food in South East Asia*, edited by Monica Janowski and Fiona Kerlogue, pp. 1-17. Copenhagen: NIAS Press.
- ロレンゾ, フェリイ・マリリン・E. 2009. 「グローバルな医療人材の交流—互恵的関係の構築に向けて」『始動する外国人材による看護・介護—受け入れ国と送り出し国の対話』安里和晃・前川典子（編）, 20-25ページ. 笹川平和財団.
- 越智方美. 2010. 「フィリピン人移住家事労働者の帰還と再統合をめぐる政治」『ジェンダー研究』13：1-14.
- Parreñas, Rhacel Salazar. 2005. *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford: Stanford University Press.
- Perruchoud, Richard and Jillyanne Redpath-Cross, eds. 2011. *Glossary on Migration*, 2nd edition. Geneva: International Organization for Migration.
- Philippine Social Security System. 2015. Overseas Filipino Workers SSS Coverage Program. https://www.sss.gov.ph/sss/DownloadContent?fileName=OFW_Coverage_Brochure.pdf(アクセス日2015年12月3日)
- Philippine Statistics Authority. 2015. Annual Per Capita Poverty Threshold, Poverty Incidence and Magnitude of Poor Families, by Region and Province: 1991, 2006, 2009 and 2012. <http://www.nscb.gov.ph/poverty/dataCharts.asp>(アクセス日2015年12月3日)
- . 2016. The 2010 Census of Population and Housing. <https://psa.gov.ph/statistics/census/population-and-housing>(アクセス日2016年1月13日)
- 佐藤千鶴子. 2009. 「医療労働者の国際移動と医療人的資源政策—南アフリカの事例」『立命館国際地域研究』29：13-32.

付録

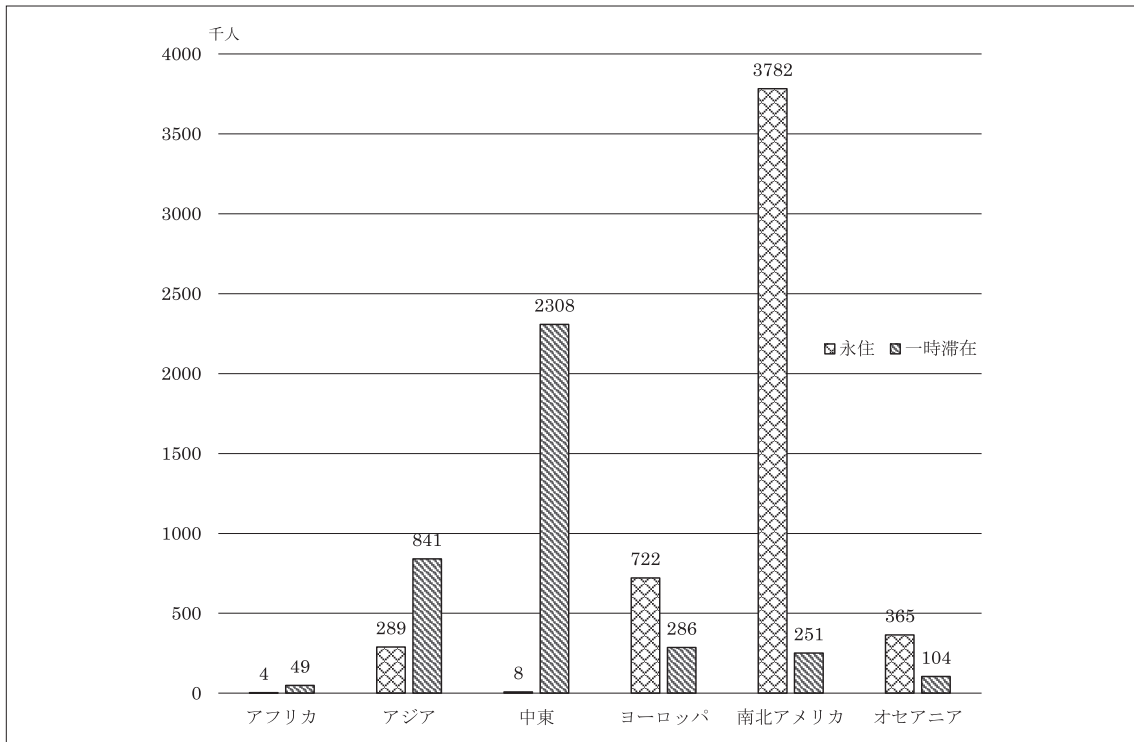


図 1：滞在地域別、滞在資格別、在外フィリピン人推定数（2013年）

出典：Commission on Filipinos Overseas 2013

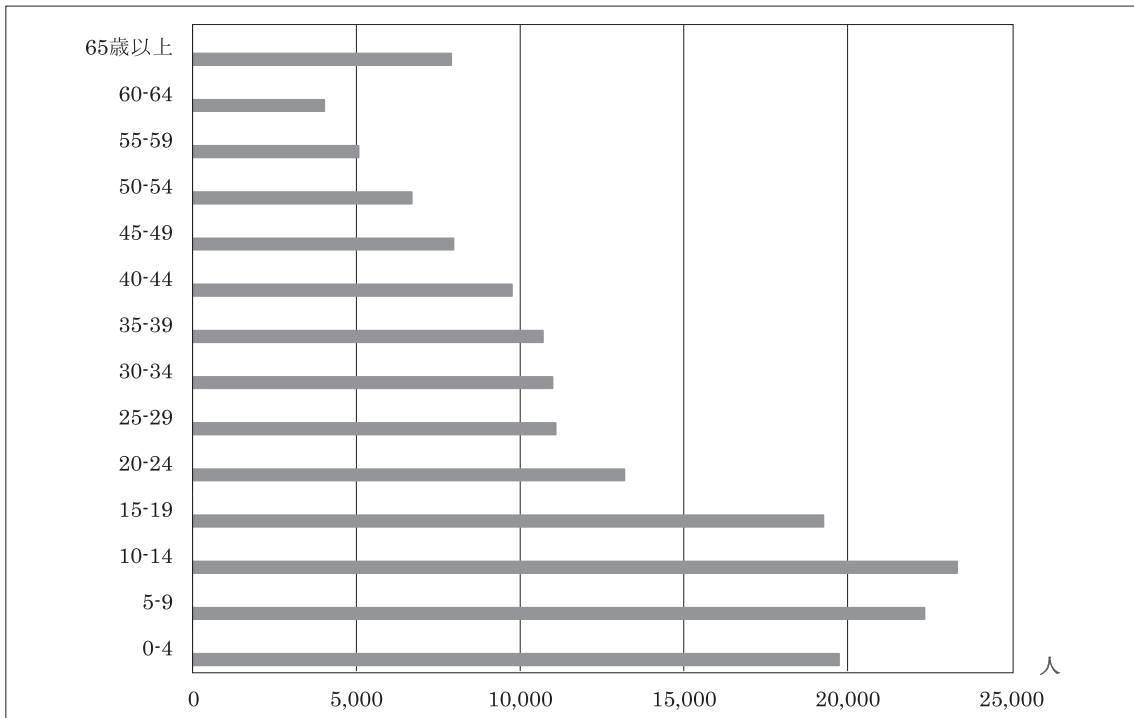


図 2：年齢層別カルバヨグ市人口（2010年）

出典：Philippine Statistics Authority 2016

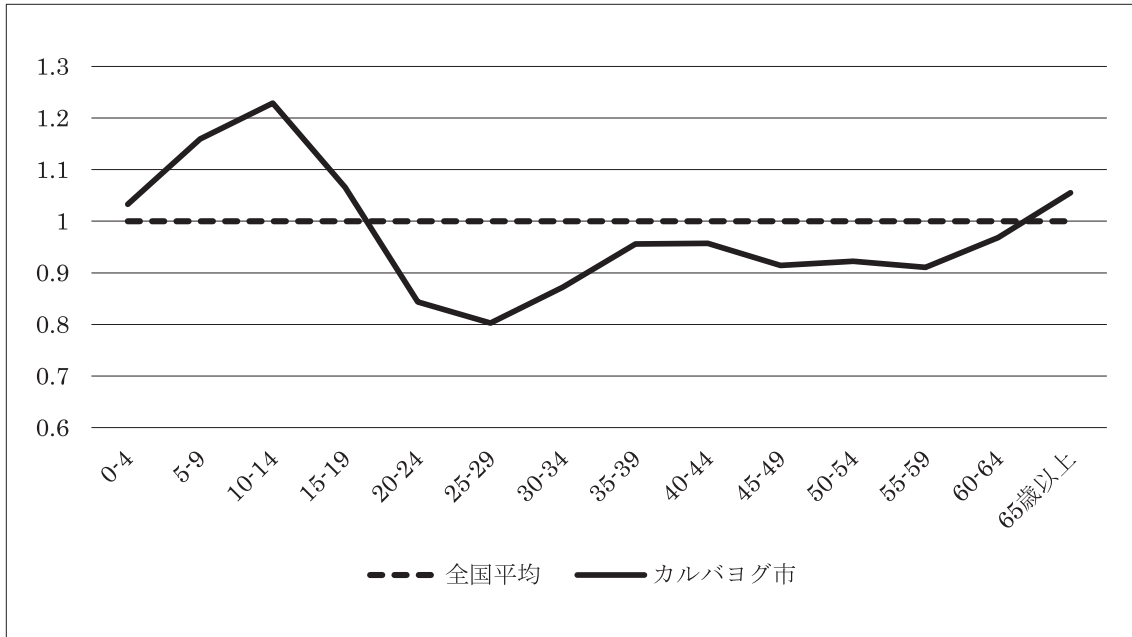


図3：フィリピン全国平均を1とした場合の年齢層別カルバヨグ市人口（2010年）

出典：Philippine Statistics Authority 2016

表1：調査対象者の聞き取り内容の概略

No.	性別	年齢	渡航先	滞在資格	渡航先の職業/仕事	滞在年数	現在の職業	現在の同居者*
1	女	96	米国	永住	孫の子守	15	無職	家族
2	男	65	米国	永住	ウェーター	8	無職	家族
3	女	57	英国	永住	家事全般	25	無職	夫
4	女	88	米国	永住	孫の子守	15	無職	ハウスメイト
5	女	71	米国	永住	会計士	45	自営業（印刷店経営）	妹
6	女	71	米国	永住	ウェーター	10	無職	家事労働者
7	男	51	米国	永住	自営業（車の販売）	36	自営業（不動産、レストラン経営）	家族
8	女	48	台湾	永住	工場作業員	14	無職	甥
9	男	47	カタール	一時	建設労働者	9	ホテル運転手	家族
10	男	58	サウジアラビア	一時	建設労働者	8	自営業（溶接）	家族
11	男	68	サウジアラビアなど	一時	電気技師	17	自営業（農業）	なし
12	女	52	サウジアラビア	一時	家事労働者	17	ホテル清掃員	家族
13	男	55	リビア	一時	機械技師	17	村長	甥
14	女	57	サウジアラビアなど	一時	薬剤師	12	自営業（レストラン経営）	家族
15	男	54	世界各地	一時	船員	22	自営業（仲買人）	家族
16	男	47	サウジアラビア	一時	店員	7	自営業（農業）	家族
17	女	62	UAE	一時	家事労働者	22	無職	なし
18	女	47	UAE	一時	家事労働者	7	自営業（惣菜販売）	家族

*複数の家族構成員が同居している場合は「家族」と記した。